zoo もりおか

第21号　2012

盛岡市動物公園

目次

・「表紙の写真」…… 2
・テーマ：盛岡市動物公園の両生類と爬虫類 …… 3
　・園内にすむ両生類 ……3～5
　・園内にすむ爬虫類 …… 5・6
　・両生類を観察しよう ……7～9
・ツシマヤマネコがやってきた …… 10～12
・ツシマヤマネコだけじゃない！盛岡市動物公園の天然記念物たち …… 13
・どうぶつこうえんうらばなし …… 14・15
・園内の自然 …… 16

表紙の写真・・・ツシマヤマネコ　（食肉目　ネコ科）

表紙は、2011年10月に盛岡市動物公園へやって来たツシマヤマネコのオス、愛称『ツシマル』です。とても稀少な日本の野生動物であるツシマヤマネコを東北以北で飼育展示するのはこれが初めてです。私たち飼育係は毎日緊張の連続ですが、そんな心配をよそにツシマルはマイペースを通し、新しい住まいにもすっかり慣れてきました。最初は放飼場にある台の中に1日中じっと動かずにいたのですが、最近は放飼場をよく歩き回り、あちこちのにおいを嗅いだり、杉の丸太で気持ちよさそうに爪とぎをする姿も見せるようになってきました。ぜひ皆さんも日に日に盛岡っ子になりつつあるツシマルに会いに来てください。

テーマ 盛岡市動物公園の両生類と爬虫類

動物公園には雑木林や草地、池や沢など、多様な環境があり、飼育する動物以外にもたくさんの種類の哺乳動物、野鳥、昆虫などが暮らしています。両生類や爬虫類も生息していて、季節ごとにそれらを観察する催し物をたくさん行ない、とても人気があります。

子供のころには誰もが一度は捕まえたことがあるオタマジャクシやカエル。でも、大人になってからあらためてじっくりと観察したことのある方は、意外に少ないのではないでしょうか。

今回は園内にすむ両生類、爬虫類を取り上げます。あらためて皆さんに注目していただき、また観察の助けになればいいと思います。

＜園内にすむ両生類＞

ヤマアカガエル（無尾目アカガエル科）

- **体長**：オス 42 ～ 60（平均 48）mm、メス 36 ～ 78（平均 68）mm。
- **生息環境**：平地から山地の林縁部にすみますが、山地に多く見られ、標高 1,900m の高地にも生息します。
- **特徴**：体はこげ茶色や赤茶色です。ニホンアカガエルに比べて体の幅が広く、また目から後ろに伸びる背中の線が目の後ろで外側に曲がることで見分けます。
- **生態**：昆虫やミミズ、ナメクジなどを食べます。日当たりが良い水田、池、沼、湖、湿原、水たまりなどの、浅い流れのない所に産卵します。ややつぶれた球状の卵かい中に 1,000 ～ 1,900 個の卵があります。
- **園内の繁殖**：四季の森のカエル池などで 3 月中旬～ 4 月下旬に産卵し、7 ～ 10 月に変態して上陸します。
- **鳴き声**：「キャラララ・・・」

タゴガエル（無尾目アカガエル科）

- **体長**：オス 30 ～ 58（平均 44）mm、メス 31 ～ 54（平均 44）mm。
- **生息環境**：山地の森林にすみ、標高 2,000m の高地にも生息します。
- **特徴**：体はこげ茶色や赤茶色で、顎の下に暗色の斑紋があります。ずんぐりした体つきで、足が太くて短く、強い跳躍力をもちます。
- **生態**：昆虫やクモなどを食べます。産卵期にオスは岩や苔の下で鳴いてメスを待ちます。渓流沿いの岩や落ち葉の間に産卵し、球状の卵かい中に 30 ～ 160 個の卵があります。
- **園内の繁殖**：4 月下旬～ 5 月下旬にメスを呼ぶオスの鳴き声が聞かれます。四季の森などの沢で産卵し、7 月以降に変態して上陸します。
- **鳴き声**：「グッグッグッ・・・」

（参考文献）「以下の記事ではこれらの文献を中心に参考にしました。」

前田憲男・松井正文 .1989. 日本カエル図鑑 . 文一総合出版 , 東京 ,206pp.

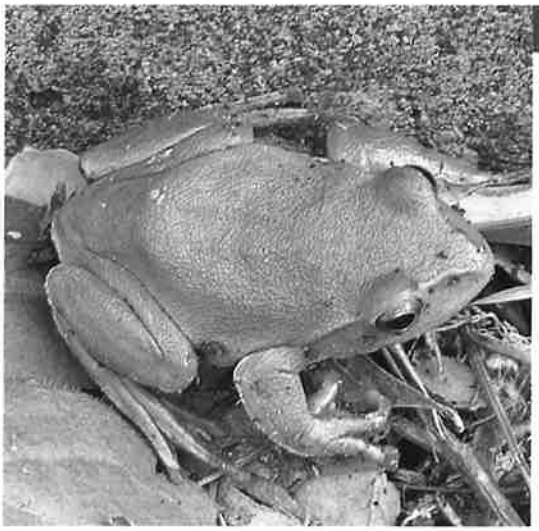
内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎 .2002. 決定版日本の両生爬虫類 . 平凡社 , 東京 ,335pp.

大谷勉・川添宣広 .2010. 日本の爬虫類・両生類飼育図鑑 . 誠文堂新光社 , 東京 ,255pp.

松橋利光・奥山風太郎 .2002. 日本のカエル＋サンショウウオ類 . 山と渓谷社 , 東京 ,191pp.

松橋利光・富田京一 .2007. 日本のカメ・トカゲ・ヘビ . 山と渓谷社 , 東京 ,256pp.

松井正文・関慎太郎 .2008. カエル・サンショウウオ・イモリのオタマジャクシハンドブック . 文一総合出版 , 東京 ,79pp.



シュレーゲルアオガエル（無尾目アオガエル科）

- **体長**：オス 32 ～ 43（平均 35）mm、メス 43 ～ 53（平均 46）mm。
- **生息環境**：平地から標高 1,600m の高地までの、水田や池、沼などの水辺近くにすみます。
- **特徴**：体は全身鮮やかな緑色ですが、周囲に合わせて茶色に変わります。アマガエルに似ていますが、目の周辺に暗色の斑紋がないことで見分けます。指先に大きな吸盤があります。
- **生態**：産卵期にオスは石のすき間や土に自分で掘る浅い窪み、草かげなどで鳴いてメスを待ちます。水田の畦や池、沼、湿地の水際で、白い泡状の卵かい中に 100 ～ 660 個の淡い黄色の卵を産みつけます。
- **園内の繁殖**：5 月上旬～ 6 月中旬にトンボ池などの水際の土中や草の根元で産卵し、7 月下旬～ 9 月中旬に変態して上陸します。
- **鳴き声**：「キリリリリ・・・」

ニホンアマガエル（無尾目アマガエル科）

- **体長**：オス 22 ～ 39（平均 31）mm、メス 26 ～ 45（平均 35）mm。
- **生息環境**：平地から山地にかけての草原や水田、市街地に生息します。
- **特徴**：体は緑色、灰色、茶色などで、周囲に合わせて変わります。鼻から目の後ろにかけて黒っぽい斑紋があります。指先に大きな吸盤があります。
- **生態**：昆虫や幼虫、クモなどを食べます。水田や池、沼、湿地、水たまりなどの浅く流れのない所に、小さな卵かいで数回に分けて 250 ～ 800 個産卵します。産卵期以外にもよく鳴きます。
- **園内の繁殖**：小さな水たまりにも産卵します。7 月に孵化が始まり、8 月上旬～ 9 月上旬に変態して上陸します。
- **鳴き声**：「クワックワックワッ・・・」

ツチガエル（無尾目アカガエル科）

- **体長**：オス 37 ～ 46（平均 41）mm、メス 44 ～ 53（平均 50）mm。
- **生息環境**：平地から山地にかけての水田や湿地、河川や渓流などの水辺に生息します。
- **特徴**：体は灰褐色で、全身にイボがあり、“イボガエル”とも呼ばれます。捕まえると皮膚から異臭のする粘液を出します。
- **生態**：アリをよく食べます。水田、池、沼、水たまりなどの流れのない所の水中の水草や枝に、数回に分けて小さな卵かいで約 1,000 個産卵します。オタマジャクシのまま越冬し、翌年の春以降に変態して上陸します。
- **園内の繁殖**：キリン放飼場内の池などで産卵し、7 月に孵化が始まります。
- **鳴き声**：「ギューギューギュー・・・」

トウホクサンショウウオの卵の数

2005 年に園内のカエル池で、トウホクサンショウウオの“卵のう”の中にある卵の数を調査しました。“卵のう”とは卵を包むバナナのような形をした透明な膜のことで、サンショウウオは、水中に沈む枯れ枝などに、一度に 2 本一対の卵のうを産みつけます。

最初の産卵は 4 月 1 日で、その後 4 月 30 日まで続き、この池では全部で 96 の卵のうが産みつけられました。一対の卵のうの中にあった卵の数は平均で約 51 個で、最多は 83 個、最少で 23 個でした。すべての卵が無事孵化したとすると、なんと約 4,900 頭の幼生が発生したことになります。

アズマヒキガエル（無尾目ヒキガエル科）

・**体長**：オス 43 ～ 161（平均 121）mm、メス 53 ～ 162（平均 126）mm。
・**生息環境**：平地から標高 2,500m の高山まで生息し、畑や森林、人家の庭先などにすみます。
・**特徴**：全身にイボ状の隆起があり、特に眼の後ろにある隆起は大きくて、毒液を分泌します。個体により体の色や模様が様々です。
・**生態**：オサムシなどの甲虫、ミミズ、アリなどを食べます。池や湖、水田、水たまりなどの流れのない所に産卵し、ひも状の卵かい中に 1,500 ～ 8,000 個の卵があります。
・**園内の繁殖**：園内ではこれまで産卵は確認されておらず、成体と亜成体だけが観察されています。
・**鳴き声**：「クックックッ・・・」

トウホクサンショウウオ（有尾目サンショウウオ科）

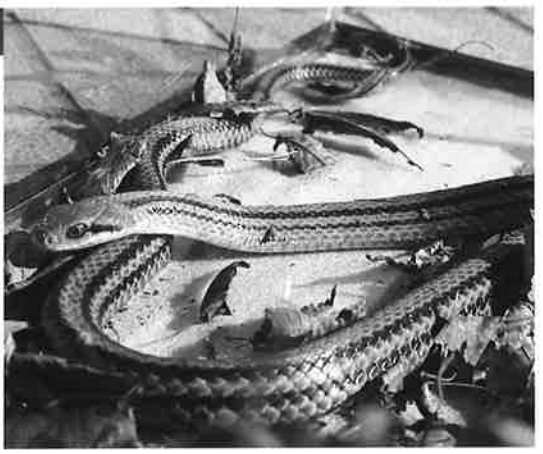
・**全長**：90 ～ 140mm。
・**生息環境**：平地から山地の森林内の林床にすみます。
・**特徴**：体は黒やこげ茶色で、小さな青白い斑点がたくさんあります。同じく県内にすむクロサンショウウオと違って尾の先が平らではなく、また尾長が全長の半分より短いことで見分けます。
・**生態**：日中は落ち葉や倒木、石などの下に隠れ、夜間に活動します。ミミズや小型の土壌動物を食べます。山間部の沢のほとんど流れのないよどみ、湧水や湿地の水たまり、浅い池で産卵します。透明でバナナ状の 2 本一対の卵のう中に 20 ～ 100 個の卵があります。幼生の多くは秋までに変態して上陸しますが、一部はそのまま越冬して翌年の春以降に上陸します。
・**園内の繁殖**：カエル池などで 3 月下旬～ 5 月上旬に産卵し、多くは 8 月以降に変態して上陸します。

ニホンイモリ（有尾目イモリ科）

・**全長**：オス 70 ～ 115mm、メス 80 ～ 140mm。
・**生息環境**：低地から山地にかけての池、沼、水田、湿地の水たまりなどに生息します。
・**特徴**：体は黒やこげ茶色で、腹に赤い不規則な模様があります。オスの頭や胴、尾は繁殖期にきれいな青紫色になり、メスを誘います。
・**生態**：水中で生活し、水生昆虫やオタマジャクシなどを食べます。数個～ 40 個の卵を 1 個ずつ水草などに産みつけることを数回繰り返し、全部で 100 ～ 400 個産卵します。幼生は秋までに変態して上陸し、成体になるまで林床にすみます。約 3 年で性成熟して成体になり、再び水中生活に戻ります。
・**園内の繁殖**：園内ではこれまで産卵が確認されておらず、成体と亜成体だけが観察されています。

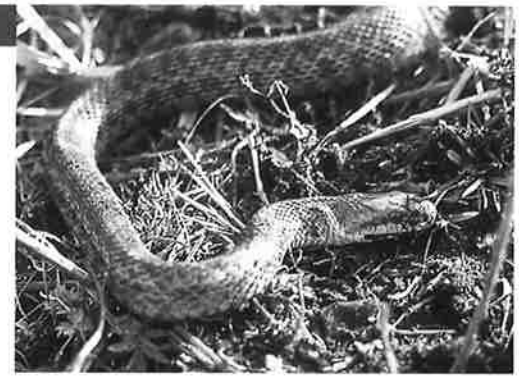
＜園内にすむ爬虫類＞

シマヘビ（有鱗目ナミヘビ科）



・**全長**：80 ～ 200cm。
・**生息環境**：平地から山地にかけての水田、農地、人家近くなどに生息します。
・**特徴**：成体はふつう茶色ですが、黒色や赤茶色のものもおり、黒の縦縞が 4 本あります。幼体は赤茶色で横縞があります。
・**生態**：カエルを好み、トカゲやヘビ、ネズミなども食べます。主に地上で活動し、泳ぎも得意です。外敵に対しては頭をふくらませ、尾を震わせて地面をたたき、威嚇します。
・**園内の生息状況**：特に水辺近くで見かけることが多く、9 月上旬には孵化して間もない幼体が見られます。

アオダイショウ（有鱗目ナミヘビ科）



・**全長**：110 ～ 200cm。
・**生息環境**：平地から山地にかけての森林、農地、人家近くなどに生息します。
・**特徴**：体はオリーブ色がかった茶色で、うすい黒の縦縞が 4 本あります。幼体にはマムシに似た横縞模様があります。
・**生態**：幼体はカエルやトカゲ、成体は鳥やネズミを好んで食べます。地上でも樹上でも活動し、泳ぎも得意です。
・**園内の生息状況**：9 月上旬に孵化して間もない幼体が観察されています。

ヤマカガシ（有鱗目ナミヘビ科）

・**全長**：70 ～ 150cm。
・**生息環境**：平地から山地にかけての水田や湿地などの水辺に生息します。
・**特徴**：体は茶色で、黒、赤、黄色の斑紋が入りますが、この模様は地域による違いが大きいです。鱗がザラザラに見えます。上顎の奥歯や首の後ろの鱗のすき間から毒液を分泌します。
・**生態**：カエルを好み、オタマジャクシや小魚も食べます。泳ぎが得意で、潜水もします。外敵に襲われると口を開けて仰向けになり、死んだふりをします。
・**園内の生息状況**：水辺でよく見かけます。孵化して間もない幼体は 7 月下旬から見られます。

ジムグリ（有鱗目ナミヘビ科）

・**全長**：70 ～ 100cm。
・**生息環境**：山地の森林に生息します。
・**特徴**：体は赤茶色で黒斑があります。幼体は体の赤みが強く、黒斑がより大きくなっています。首のくびれが目立たず、胴と頭が同じ太さに見えます。
・**生態**：地中の穴を移動してネズミやモグラを捕えます。高温が苦手で、夏は不活発になります。
・**園内の生息状況**：孵化して間もない幼体は 6 月上旬から見られます。

ニホンカナヘビ（有鱗目カナヘビ科）

・**全長**：160 ～ 270mm、（頭胴長 50 ～ 70mm）。
・**生息環境**：平地から低山地の藪や草地、人家の庭先などに生息します。
・**特徴**：体は背が茶色、腹が白や淡い黄色で、鱗がザラザラに見えます。尾が長く、全長の約 2/3 を占めます。尾をつかまれると自切します。
・**生態**：小さな昆虫や幼虫、クモなどを食べます。日中の暖かい時間を選んで採食と日光浴を繰り返します。2 ～ 6 卵ずつに分けて複数回産卵します。
・**園内の生息状況**：孵化して間もない幼体は 9 月上旬から見られます。

アオダイショウの卵

2005 年 3 月 29 日、飼育中のアオダイショウに交尾が見られました。交尾は 2 頭が複雑に絡み合ってあまり動かない状態で朝から昼頃まで続きました。

何とか産卵、繁殖をさせたいと思い、土と湿らせた苔を入れておいたところ、6 月 10 日、土と苔の間に 6 つの産卵がありました。卵は殻が柔かく、縦約 2.5cm、横約 6cm の細長いだ円形でした。

83 日後の 9 月 1 日にそのうちの 3 卵が孵化しました。子はこの時期にしかない口先の“卵歯”を使って、殻をナイフで切り裂くようにして出てきます。生まれた直後の子は全長約 40cm、体の幅は約 1cm でした。初めての脱皮は孵化から約 10 日後で、その後は 1 年に 3 ～ 4 回のペースで脱皮し、孵化から 1 年後には全長約 60cm、2 年後に約 90cm、3 年後には 100cm を超えて順調に成長しました。

孵化した 3 頭は今も元気で、2011 年にはそのうちの 1 頭が繁殖しました。飼育下での“孫”の世代の誕生です。

〈両生類を観察しよう〉

園内で毎年繁殖する４種の両生類について、観察しやすい場所や、季節ごとの観察のポイントを紹介します。実際に両生類を観察してみましょう!!

＜ヤマアカガエル＞

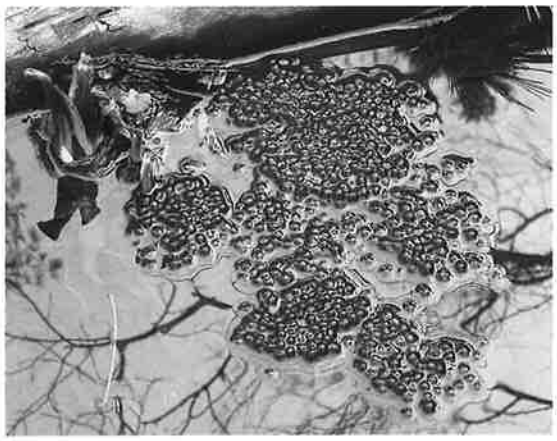
園内にすむ両生類のうちで毎年一番早く産卵を始めるのはヤマアカガエルで、早くて３月上旬、遅くても３月下旬には産卵が始まり、４月下旬まで続きます。四季の森にあるカエル池や芝生広場にあるトンボ池、カワウソ舎近くのビオトープ内の池のほか、子供動物園のカメ池、あるいはちょっとした水たまりでも産卵しますが、観察は四季の森のカエル池がおすすめです。

ヤマアカガエルの卵かいは直径 10cm くらいの球状で、池の周りの浅い所に産卵されます。写真．１のように数個の卵かいがくっついて産みつけられていることもあります。産卵が開始される時期には、カエル池の周辺にまだ雪が残っているので、４月に入ってからのほうが観察しやすいでしょう。

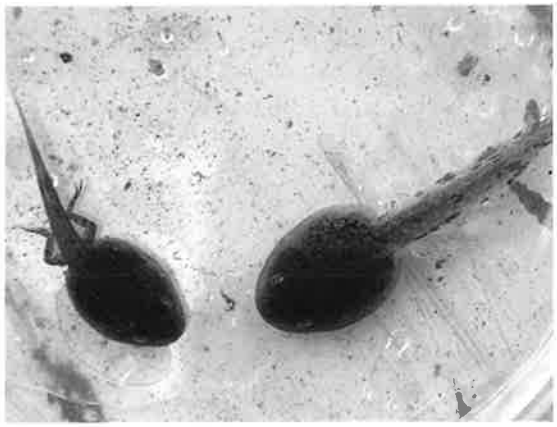
この時期には繁殖のためにたくさんの成体が池に集まっているので、卵かいだけでなく、成体を観察したり、鳴き声を聞くこともできます。成体は人の気配にとても敏感で、近づくとすぐに水中に隠れてしまいますが、そっと覗くと池の底でじっとしている姿を観察できます。気配に気づかれずに池に近づければ、メスを誘うオスの「キャララララ・・・」という鳴き声を聞くこともできます。

孵化は、産卵の３～４週間後の４月上旬から始まります。孵化直後のオタマジャクシは全長約 1cm で、泳ぎ回らずにじっとしています。１つの卵かいからは 1,000 ～ 2,000 頭ものオタマジャクシが孵化するので、それらが寄り集まっている様子はなかなかの見ごたえがあります。ぜひ観察してみてください。

オタマジャクシは、７月に入ると大きいもので約 4.5 ～ 5cm に成長し、中には後ろ足が生えたものも見られ始めます（写真．2）。池

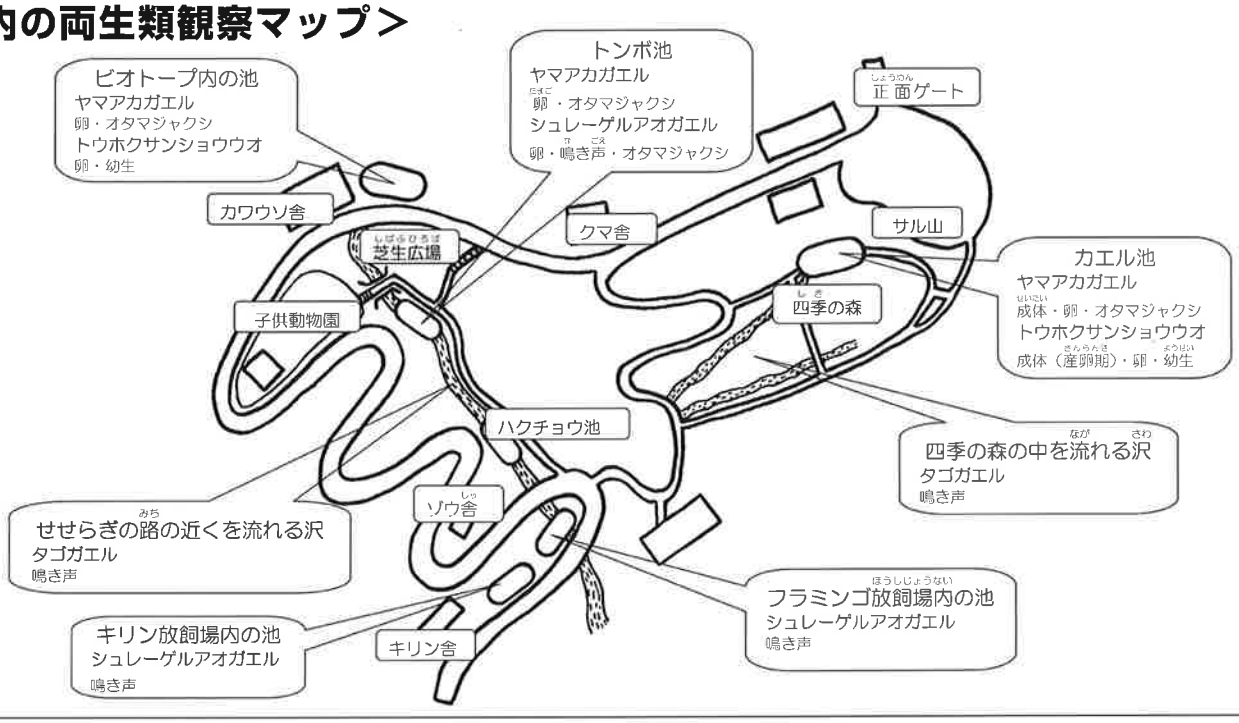


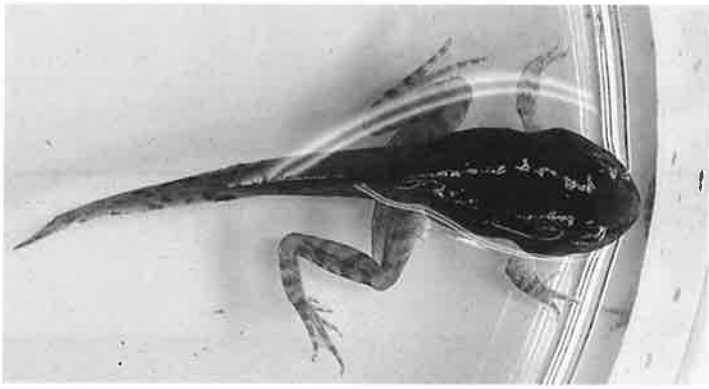
写真．１　複数のメスが産みつけたヤマアカガエルの卵かい



写真．２　７月に見られたヤマアカガエルのオタマジャクシ

＜園内の両生類観察マップ＞





写真．3　手足が生えそろった変態前のヤマアカガエルのオタマジャクシ

の縁から手を伸ばし、実際にすくって観察してみましょう（飼育係に声をかけてすくう道具を借りましょう）。捕まえたオタマジャクシの観察ポイントは、皮膚が薄くて内臓が透けて見えるお腹や、食べ物をむしり取るためのちょっと変わった形の口などです。

7月中旬になると、写真．3のように前足も生えたオタマジャクシを観察できます。手足が生えそろった後、尾は少しずつ体の中に吸収されて短くなりますが、そうすると水中ではなく、浅い岸辺に集まってきます。そして7月下旬には、尾がすっかりなくなって変態を終えた、体長約1cmの子ガエルが上陸を始めます。子ガエルの上陸は8月に最も多く、9月にかけて続きます。池の周りでかわいい子ガエルたちを探してみるのもおすすめです。

10月に入ってからもわずかですが子ガエルや、あるいはまだ尾の残るオタマジャクシを見かけますが、冬までには全てが変態して上陸します。

＜トウホクサンショウウオ＞

写真．4　産卵前でお腹が大きいトウホクサンショウウオのメス

春、ヤマアカガエルに続いて産卵を始めるのがトウホクサンショウウオです。産卵は早くて3月下旬、遅くても4月上旬には始まり、5月上旬まで続きます。トウホクサンショウウオの成体は、林の中で落ち葉や倒木、石の下に隠れて暮らしていますが、この時期には繁殖のために、産卵場所となる水辺に寄ってきます。四季の森のカエル池やカワウソ舎近くのビオトープの池で観察できますが、カエル池の方が出会える確率が高いようです。水中の落ち葉の下や泥の中に隠れていますので、目を凝らして池の中を覗いてみましょう。

サンショウウオは外見からオスメスの区別はできませんが、この時期だけは、写真．4のように卵を抱え、明らかにお腹がふくらんでいるメスを見分けることができます。

写真．5　トウホクサンショウウオの卵のう

産まれた卵のうを観察してみましょう。卵のうはカエル池をまたぐ橋の下の日陰に集中してありますので、覗いてみましょう。卵のうは、写真．5のように、2本一対の透明なバナナ状の形をしています。水中に沈んでいる枯れ枝に産みつけられていますので、外れ落ちてしまわないように気をつけて、枝ごとそ～っと持ちあげて観察してみましょう。卵のう中に20～80個の卵が入っているのが分かります。観察が終わったら、卵のうは同じ場所に戻してあげてください。

産卵から約1ヶ月半後の5月中旬に孵化が始まり、6月上旬まで続きます。孵化直後の幼生は全長約1.5cmで、頭の横には外鰓（外に飛び出した鰓）があります（写真．6）。

写真．6　孵化して間もないトウホクサンショウウオの幼生

このころ一緒に観察できるヤマアカガエルのオタマジャクシとは、明らかに姿が違うので、簡単に見分けがつきます。オタマジャクシは泳ぎ回っていますが、サンショウウオの幼生は水の底でじっとしています。

幼生は孵化から約1ヶ月で全長約3cmになります。手足が生える順番はオタマジャクシとは逆で、まず前足が生えはじめ、その約半月後に後ろ足も生えそろいます。約4cmまで成長すると外鰓がなくなって変態し、成体と同じ姿になって、8月から9月にかけて上陸します。

ところが、秋が深まったころ、身体は全長約5cmに成長したものの、まだ変態しない幼生が池の中に残っています。この幼生は落ち葉の下や泥の中に潜り込んでいるので、見つけるのがとても難しいのですが、毎年10月に、ざるを使って泥の中の幼生を探し出す観察会を行なっていますので、ぜひ参加してみてください。このなかなか変態しない幼生はそのまま水中で越冬し、翌年の春、全長約6cmになってから（写真.7）、変態して上陸します。トウホクサンショウウオの成体は滅多に発見できませんので、幼生を観察するのがよいでしょう。

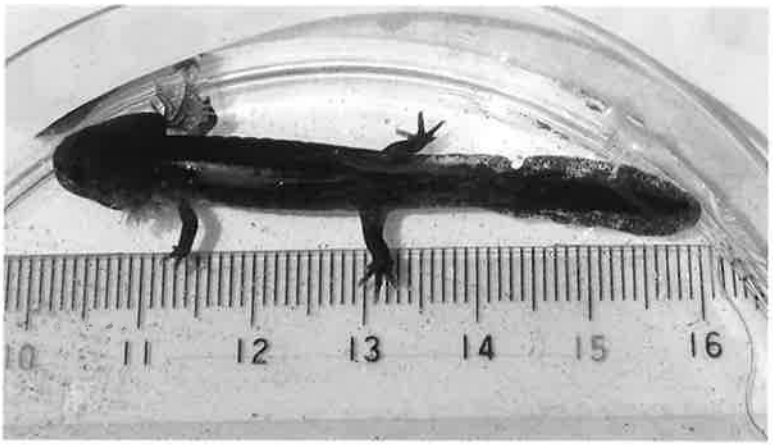


写真.7　越冬して変態前のトウホクサンショウウオの幼生

＜タゴガエル＞

タゴガエルは、産卵場所となる四季の森の中を流れる沢でその声を聞くことができます。オスが身を隠しながら小さく「グッグッグッ・・・」と鳴いてメスを誘うのです。早くて4月中旬、遅くても5月上旬には鳴き始め、5月下旬まで続きます。すぐ近くで鳴き声を聞いても、その姿はなかなか見つかりません。また産まれた卵かいを発見するのも難しいです。四季の森の中を散策しながら耳を澄まし、まずは鳴き声を楽しみましょう。

＜シュレーゲルアオガエル＞

シュレーゲルアオガエルは芝生広場にあるトンボ池や、キリンの放飼場、フラミンゴの放飼場の中にある池で産卵します。メスを誘うオスの「キリリリリ・・・」という鳴き声は、早くて4月中旬、遅くても5月上旬に始まり、7月上旬まで続きますが、遠くまでよく響く声なので、離れた所を歩いていても耳に届きます。

産まれた卵かいはトンボ池の周りの、水際の土の中や草の根元で観察できます。草をかき分けながら注意して探すと、写真.8のように、草の根元の土の中から覗く、白い泡状の卵かいの一部を見つけることができます。

卵は産卵から1～2週間後に孵化します。孵化したばかりのオタマジャクシは全長約1cmほどですが、夏には約4cmに成長し（写真.9）、7月下旬から始まる変態は、9月上旬まで続きます。

これらの両生類は、その気になって探さないと、なかなか目にはつきません。これらのことを参考に、ぜひ両生類を探しに来てみてください。そのつもりになって探し、実際に探し当てることができると、なかなかの感動を味わえるものですし、両生類ファンになる第1歩を踏み出せます。

写真.8　シュレーゲルアオガエルの泡状の卵かい

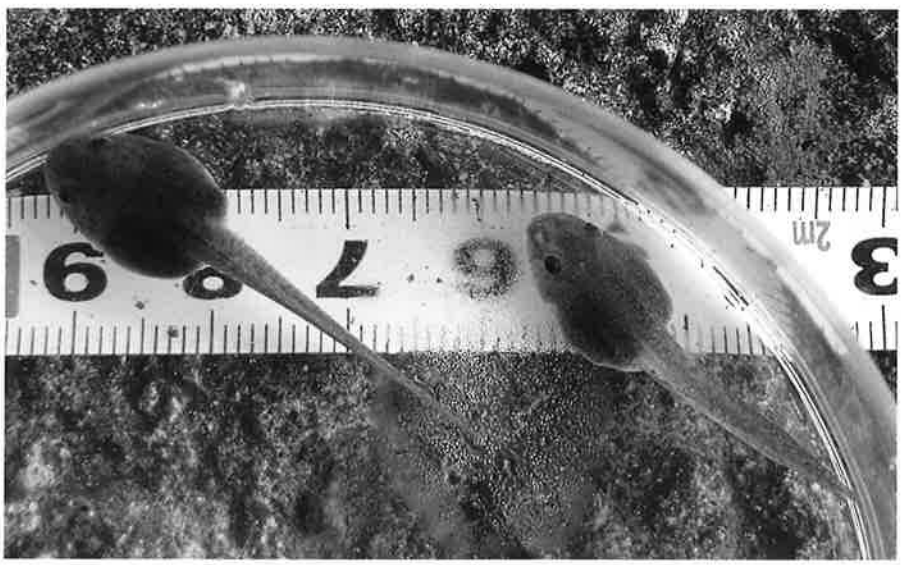


写真.9　シュレーゲルアオガエルのオタマジャクシ

ツシマヤマネコがやってきた

2011年10月、盛岡市動物公園に新しい仲間として“ツシマヤマネコ”がやってきました。東北以北の動物園では初めての飼育展示です。

＜ツシマヤマネコとは＞

ツシマヤマネコは長崎県対馬だけに生息する野生のネコ科の動物で、約10万年前に当時陸続きだった大陸から渡ってきたと考えられ、ベンガルヤマネコの亜種とされています。広葉樹林の谷間や林縁部、集落近くの田畑や湿地、海岸付近にすみ、おもにネズミ・モグラなどの小哺乳類、鳥類、両生類、昆虫類を捕らえて食べます。メスの行動圏は1～2㎢で定住性が強く、それに対してオスの行動圏は広く、冬季にはメスの7～8倍にもなります。2～3月頃に交尾をし、4～6月頃に1～3頭の子を産み、生まれた子は生後6～7ヶ月で独り立ちします。

＜ツシマヤマネコが盛岡にやってきた理由＞

ツシマヤマネコが生息する対馬では、生息環境の悪化、交通事故、イエネコからの感染症などにより生息数が減少しています。1960年代には約300頭生息すると推定されていましたが、1971年に国の天然記念物に指定された後も数を減らし続け、2006年の環境省による調査ではわずか80～110頭を残すだけとされています。環境省が作成する絶滅のおそれのある動物をまとめたレッドリストでは、イリオモテヤマネコと同じく最も絶滅の危険性が高い順位にランクされているのです。そのため環境省は、ツシマヤマネコを守るための様々な保護や増殖の事業を展開しており、その一環として日本動物園水族館協会との連携で、飼育下繁殖事業を行なっています。これは各地の動物園に分散飼育して感染症などによる全滅を回避しながら、繁殖を推進して個体数増を図り、将来野生復帰させる個体を確保すること、あわせて飼育下でしか得られない様々なデータを収集すること、全国的な普及啓発をすることを目的としたものです。2011年現在、対馬にある野生生物保護センターの他に国内の8つの動物園で38頭のツシマヤマネコが飼育されており、繁殖にも成功しています（図.1）。それでもツシマヤマネコが長期的に安定して存続するため、また野生復帰個体を確保するためには頭数や飼育施設がまだまだ足りないので、動物園

図.1　ツシマヤマネコ飼育施設（2011）

での飼育・繁殖をさらに推し進めていかなければなりません。そこで盛岡市動物公園でも環境省の事業に協力し、保護に関する普及啓発をしていくためにツシマヤマネコを迎え入れることにしたのです。

＜迎え入れるための準備＞

とても貴重なツシマヤマネコを迎え入れるために、大きな緊張感を持って、飼育係全員で準備にあたりました。ツシマヤマネコに係わる会議へ参加し、飼育技術習得や飼育施設改修のために他園を視察して研修を受けました。そしてヤマネコの飼育に適した環境を作るために、放飼場や寝室の改修を行ったのです。寝室には暑さ、寒さ対策を万全にするためにエアコンを設置し、また足をはさんでケガをしないよう、天井も含めてすべての危険なすき間をアクリル板などで埋めました。放飼場は野生での生息環境に近くなるように配慮し、日陰・隠れ場所となるような樹木をたくさん植え、またヤマネコがお腹の調子を整えるために食べる草も植えました。高い所を身軽に歩くところを見てもらえるように丸太を組んで通路を作り、また爪とぎ用の丸太も設置しました。休んでいる姿を観察しやすいように丸太と木の板で台を作り、ヤマネコがそこを気に入るように台の下には床暖房を設置、周囲に風よけのためのアクリル板を張りました。ヤマネコは水の中に入るのが好きなので、池や小さな滝も作りました。それでもまだ飼育環境が万全かどうか心配でした。

放飼場

来園することになったのは、2005年に福岡市動物園で生まれ、その後しばらく対馬野生生物保護センターで飼育されたあと、2010年から富山市ファミリーパークで飼育されていた6才のオスです。移動日が2011年の10月18日と決まったのは、改修を行なっている最中の9月中旬になってからでした。

＜ツシマヤマネコがやってきた！！＞

富山から盛岡までの移動には、車でおよそ8時間かかりました。長旅にも関わらず疲れたそぶりを見せることなく、また初めての獣舎に臆することもなく、輸送箱からすんなりと出て寝室に収まってくれました。環境が変わると慣れるまでエサをなかなか食べてくれない動物も多いのですが、すぐに用意したエサをすべて食べてくれ、輸送が無事に済むように祈っていた飼育係一同は、それでやっと胸を撫で下ろしました。その後も新しい環境で不慮の事故が起こらないか、体調を崩すことはないか、飼育係の緊張が解けることはなかったのですが、そんな心配をよそに、鳥肉や馬肉、ニジマスなどのエサを毎日ぺろりと残さず食べてくれました。特に体調を崩すこともなく、寝室内にも慣れたように思えた来園5日目、一般公開に向け、放飼場に慣れてもらう練習を開始しました。すんなりとは外へ出てくれないかもしれないと思っていましたが、扉を開けた途端、外の様子をうかがうこともせずに、待ってましたとばかり、勢いよく放飼場へ出ました。そこが初めての場所とは思えないくらいにとても落ち着いた様子で、まずは放飼場全体を調べながらゆっくりと歩き、その後は丸太で爪をといで自分をアピールし、それも一段落すると、苦労して整えた自慢の台に早速入ってくれました。それ以来その台が一番のお気に

入りの場所となり、いつもそこで休んでいます。雨風や寒さをしのげ、ゆっくり休め、なおかつお客さんからも観察しやすい場所をどのように作ってやったらいいか、本当に悩みましたが、思惑がずばり当たって嬉しかったです。苦労して作ったかいがありました。

＜そして展示開始！＞

それから1週間後の一般公開の前日に報道公開を行ないました。ヤマネコはさすがに多くの報道関係者やカメラを気にして縮こまり気味でしたが、ツシマヤマネコ来園のニュースが多くの新聞やテレビを賑わせました。そして待ちに待った10月29日、ツシマヤマネコの一般公開をついに迎えることができました。天候にも恵まれ、その姿を見ようと多くの方が訪れてくださいました。11月6日には来園記念イベント「ようこそ！ツシマヤマネコ」を実施しました。

台の中でくつろいでいる様子

対馬で保護活動に取り組んでいる対馬市役所の玖須博一さんを講師に招いての“対馬の自然とヤマネコについての講演会”、動物公園友の会のみなさんによるツシマヤマネコ歓迎紙芝居、愛称募集の開始、ペーパーウェイト作りなどツシマヤマネコにちなんだ色々な催し物を行ないました。当日は雨降りであいにくの天気でしたが、ツシマヤマネコに関心を持った多くの方が集まってくださり、とても盛り上がりました。愛称は最も投票の多かった『ツシマル』に決まりました。

＜これからの『ツシマル』の役目＞

現在、対馬を中心に、「NPO法人ツシマヤマネコを守る会」、「ツシマヤマネコ応援団」、「NPO法人どうぶつたちの病院」、「佐護ヤマネコ稲作研究会」、「舟志の森自然学校」など多くの団体がそれぞれの視点からツシマヤマネコの保護活動を行なっています。日本動物園水族館協会は、多くの動物園が連携してツシマヤマネコの飼育下増殖事業に取り組んでいます。また環境省が中心になって行なう、飼育下で生まれた個体を対馬の自然に戻す“野生復帰事業”が実を結び、ツシマヤマネコが末永く対馬に存続することを願ってやみません。

『ツシマル』は、対馬から遠く離れたここ盛岡の地にあって、稀少な日本の野生動物であるツシマヤマネコとその保護活動について伝える、いわば動物大使のような役目を持ちます。多くの来園者にツシマヤマネコのことをよく分かってもらい、そこからツシマヤマネコに限らず、日本の野生動物や自然環境のことについて意識を向けてもらえるような、そんな展示や普及活動をしたいと考えます。

これから毎年、ツシマヤマネコを紹介するイベントを展開します。どうぞみなさん、ツシマルに会いに来てください。

ツシマヤマネコだけじゃない！
盛岡市動物公園の天然記念物たち

ニホンカモシカ（特別天然記念物）

現在はオス、メス１頭ずつを飼育しています。当園ではこれまで３回の繁殖がありました。現在のペアはオスがやっと大人になったところですが、２頭の相性がとてもいいので、久しぶりに繁殖があるのではと期待しています。皆さんにかわいいカモシカの赤ちゃんをお見せしたいと思っています。

オス。平成19年生まれ。幼いころはとても人に慣れていたのに、大人になるに従ってオスらしく気が荒くなり、角を向けて威嚇してくることも…。見てください、この精悍な顔つき。

メス。平成10年生まれ。とても人懐っこく、体を撫でられるのが大好き。人を見かけると近づいてくることも…。メスらしいやさしい顔つきでしょ？

ニホンイヌワシ（天然記念物）

野生のニホンイヌワシはとても数が減り、絶滅が心配されています。飼育する動物園同士で連絡を取り合い、将来飼育下で生まれたイヌワシを野生に返すことまでを視野に入れて、真剣に繁殖に取り組んでいます。当園のペアの繁殖にも強い期待が寄せられています。２羽の相性は良く、３年前からは毎年抱卵もしていますが、メスがやっと大人になったところで、まだ若いためか、これまでは孵化には至っていません。そろそろ初の雛誕生があると思っています。

オスの『出羽』。平成11年生まれ。オスらしくどっしりと落ち着きがあり、頭だけをぐるりとひねって、鋭い眼光でこちらを睨みつけます。

メスの『空』。平成15年生まれ。警戒心が強く、展示場をよく飛び回ります。全身で飼育係を威嚇してくることがあります。

ニホンヤマネ（天然記念物）

ヤマネは数年に１度弱って保護されますが、その一部の野生復帰できないヤマネを飼育し続けるうちに繁殖に成功し、さらに飼育方法を色々改善することによって繁殖率も高まって、今では日本の動物園でも有数の大所帯になりました。盛岡市でも意外に私たちの生活圏の近くに生息していますが、小さい体と夜行性のため、目撃することはまずありません。かわいい姿を見られるのは動物公園ならではです。

どうぶつこうえんうらばなし

「サイはサルが嫌い」

サイの仲間は全部で５種ですが、そのうちシロサイは体が最も大きく、近くで見れば迫力満点、初めて見る人はつい腰が引けちゃうと思います。ところが普段はとてもおとなしい動物で、動物公園のメスの“サイカ”もとても人懐っこく、部屋の中では柵越しにお尻をすりよせてきて、大好きな“お尻かいかい”をおねだりしてきます。「それ、何？」ですって？サイの皮膚は全身頑丈で固いのですが、足の付け根の内側は唯一柔らかく、触られると気持ちがいいようで、そこをこすってほしがるのです。

その日もサイカに近付いて行くと、いつものようにお尻を向けてきたので、“お尻かいかい”をしてやろうと手を伸ばした途端・・・、「触るな～！！」とでもいうかのように、サイカが突然激しく暴れはじめました。あの巨体が目の前で、大きな頭を振りまわして角を柵にガンガンぶつけながら、グルグル回りはじめたのですから、恐ろしいほどで、どうしていいかわからなくなりました。

放飼場で何かの大きな物音に驚き、走り回ったりするようなことはこれまでもありましたが、その時は驚くようなことは何もありませんでした。どうしてしまったのでしょう？私に対して敵意丸出しです。ちょっと悲しくなりましたが、まずは落ち着きを取り戻してもらおうと、とりあえず一端その場を離れ、我にかえって暴れた理由を考えてみると、ひとつ思い出したことがあります。同僚が以前、こんなことを言っていました。「サイはサルの臭いが嫌い」。

確かにその日は年に一度の大作業、飼育係と獣医が総出でサル山のニホンザルを全頭捕まえ、１頭ずつ順番に押さえて個体番号を確認し、また体重を測ったり健康チェックをするという日で、それを済ませた私は作業着から長靴まで、全身サルの臭いにまみれていたのです。サイカが大暴れしたのは、きっとそのサルの臭いのせいだったのに違いありません。その証拠に作業着を着替え、念入りに手を洗ってサイカの所に戻ると、ケロリともとの可愛いサイカにもどっていました。“お尻かいかい“をしてあげました。

いろいろな動物の世話をしますから、それらの臭いが体につくことは毎日のようにありますが、それをサイカが嫌がったことはそれまでありません。あまりに強く臭いが染み付いていたせいなのでしょうか。それともサルの臭いだけ特別に嫌いなのでしょうか。よく分かりません。

それでも私は、この教訓を飼育係がしっかり捉え、ずっと将来まで確実に言い伝えていくように徹底するつもりです。「サイはサルの臭いが嫌い」。

「じゃじゃ馬カエデと知恵くらべ!?」

カナダカワウソのメスの“カエデ”はとにかくやんちゃで、イタズラ大好き。

遊び道具としてプールの中に入れたロープの輪をグルグル何度もくぐったり、それをくわえたまますごいスピードで泳いでみたりと無邪気に遊ぶのはまだ序の口。突然放飼場の砂を一心不乱に掘ってみたり、ナナカマドの木にからみつくようにして登ってみたり、エサの時間になってもイカダの下に隠れてなかなか出てこなかったり…それはもう天下一品のじゃじゃ馬ぶりです。

そんないたずらの中で困らされるのは、プールの栓を抜かれてしまうことです。カワウソのプールは大小２つあり、小さいプールから大きいプールへ滝になって水が流れ落ちています。水を循環させながらろ過しているのです。大きいプールの水は外にある大きなバルブで抜く仕組みなので問題ないのですが、小さいプールの方は、家のお風呂の栓と同じものがプールの底についており、カエデはそれを抜くことに楽しみを見つ

けてしまったのです。抜かれると滝が止まってしまい、せっかくの雰囲気がなんだか淋しげになってしまいます。「こりゃ何とかしないとイカン！」

まずはカエデの注意が栓に向かないよう、プールの底と似た色の5kg位の石を栓の上にのせてみました。重石の役目もするはずだったのですが…大方の予想通り、カエデはあっさり石をずらして栓を抜いてしまいました。そりゃそうです。水中では石に浮力がかかりますからね。分かってはいたんです。

そこで今度は石に栓を針金でしっかりとくくりつけ、石ごと真上に引き上げないと栓が抜けないような仕掛けにしました。カエデを寝室から出すと、真っ直ぐに小さいプールに向かい、早速日課の栓を抜く作業に取りかかりました。新しい仕掛けを攻略すべく、体をうねらせながら水中で頑張っていましたが、今度はそうはうまくいかないはずです。しばらくしてから様子を見に行くと、滝は音を立てて流れ続けていて、カエデは諦めたのか、頑張りすぎて疲れたのか、お腹を上にして眠り込んでいました。この闘いの勝利を確信しました。

ところが1週間後、我が目を疑う事態が…なんと滝が止まっていたのです！毎日毎日頑張った結果、カエデの筋力が上がったのでしょうか？それともどこかにスキを見つけたのでしょうか？

よく見てみると、力づくで石を動かしてしばった針金を変形させ、石をひっくり返して栓を抜いた形跡がありました。「もう～っ！これじゃイタチごっこじゃないか！」

ハッと気付きました。まさにそのとおりです。カワウソってイタチ科ですからね。

じゃあ、仕方ないか…もう少し知恵くらべに付き合うしかないですね。

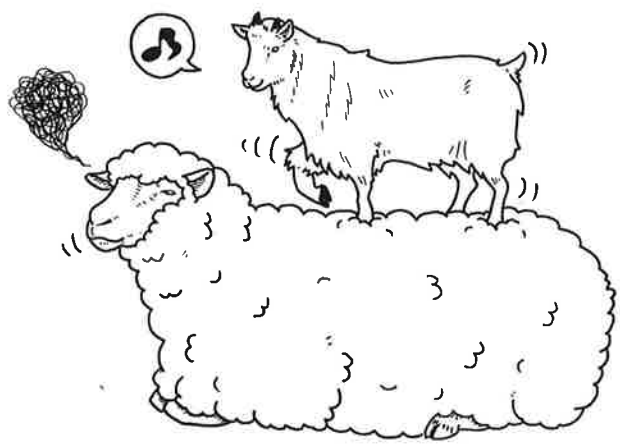
『子ヤギのマッサージ』

こどもどうぶつえんでは、毎年春に子ヤギが産まれます。お母さんヤギの出産予定日が近づくと、他のヤギたちと分けて別の部屋に移し、寝ワラをふかふかに敷いたり、小さな子ヤギが挟まりそうな隙間をふさいだり、いろいろ準備をします。朝、部屋に行って元気な子ヤギが産まれているのを見つけると、とても嬉しい気持ちになります。

産まれたばかりの子ヤギは、お母さんヤギの側を離れませんが、しばらくするとまるで少しずつ自分の運動能力を確かめながら自分を鍛えるかのように、活発に動き回るようになります。突然ダッシュしたり、いきなりピョンと跳ねてみたり、その仕草はとてもかわいいものです。ヤギはもともと高いところが好きですが、子ヤギ同士でアヒル池の岩の上に登って遊んでいることもよくあります。

そんなある日のこと。いつものようにヤギ広場の掃除にいくと、子ヤギが何かに登って遊んでいました。「あれ、何に登っているの？」と目を凝らしてみると、子ヤギの足元にはもこもこの白い毛が。なんと、子ヤギは座ったヒツジの上に乗って立っていたのです。やはり少しぐらぐらするのか、足をふみふみしながらバランスをとっている様子は、さながらお父さんの背中に立ってマッサージしている人の子供のように見えます。

一方のヒツジはというと、嫌がって振り落とすこともなく、無表情でされるがままになっていました。迷惑だと感じつつも、子ヤギに対して優しい気持ちになって、許していたのでしょうか？



そんな子ヤギは調子に乗って？、今度は座っているお母さんの背中に乗って遊んでいました。赤の他人の？ヒツジが許すのですから、お母さんが許さないわけがありません。

ヒツジもお母さんもあまりに平気そうにしているのを見て、ふと思ったのですが、ひょっとして子ヤギの背中ふみふみは、つぼマッサージになっていたりして…！？

ツリフネソウ（ツリフネソウ科）

高さ40～80cmの、山野の湿地や水辺に群生する一年草で、北海道から九州まで広く分布します。8月下旬から9月にかけて3cmくらいの赤紫色の花を咲かせます。動物公園では四季の森などで見られます。

花の形やつき方が帆掛舟を吊り下げたように見えることからこの名前がつき、漢字では「吊舟草」、あるいは「釣船草」と書きます。花粉を運ぶハチやアブが出入りしやすいようにこの独特な花の形になったと言われます。

花言葉は「私に触らないで」ですが、熟した果実はホウセンカと同じように、少し触れただけで種がはじけ飛ぶ仕組みになっています。見て触れて楽しめる植物です。

ZOO もりおか

第21号2012年

発行日　平成24年3月30日

編集・発行　(財)盛岡市動物公園公社

〒020-0803　岩手県盛岡市新庄字下八木田60-18

TEL.019（654）8266

印　　刷　川口印刷工業株式会社